

## 人間福祉研究を再考する

人間福祉学部長 牧 里 毎 治

学部と研究科が設置されて6年が経とうとしている。あらためて人間福祉学あるいは人間福祉研究とはなにか再考してみたい。人間学となるとなにより哲学、倫理学などを連想するが、また文化人類学とかも思い浮かんでくる。もう一つの福祉学のほうは、社会福祉学や福祉社会学など学問らしくはなってきたけれど、まだ学際科学的な色彩も残しており、学術研究としては道半ばという感もある。

社会福祉学、社会福祉研究も広い領域をカバーしているようで狭いし、専門職教育につらなる社会福祉研究に偏り過ぎているようで、狭い範囲に閉じ込められているようにもみえるが、しかし、学際研究の裾野は広くて遠い。福祉国家や福祉政策など生活施策に関わる範囲を示す場合もあるが、そのなかのパーソナル・ソーシャル・サービスのようないくつかの対人的、個別的社会福祉事業とその方法・技術を意味する場合もある。ソーシャルワークのようにかつては社会事業と呼ばれる歴史的存在を連想する時もあるれば、今日的な援助技術の体系を想定する時もある。けっこう社会福祉をめぐる概念と実態は複雑なのである。最近では人類福祉とか世界福祉などの用語を使う人もいて、混乱を来していることもある。

そもそも福祉の「福」も「祉」も幸せを語源としては意味しているようで、倍返しではないが、2倍の幸せを表しているのである。幸福も2倍の幸せということになるのだろうけれど、なぜ同義語を重ね合わせて用いる必要があったのだろう。随意随想ということでお許しをいただければと珍説を展開すれば、昔の人たちは2倍の2重の幸せを求めたからだ、ということにしておこう。たとえば、「冥福を祈る」と言うけれど、これは冥土でも幸せにと哀悼の意を表しているわけで、現世の幸せとあの世の幸せを分けていた証拠ということになる。地獄に落ちないように極楽浄土の暮らしを願ったわけである。もう一つの解釈は、幸せは「仕合わせ」とも書くが、これは仕え合うという意味だから、人々が互いの幸せを重ね合わせよう、つまり支え合うことによって本当の幸福を得られると考えられたのだろうか。なんだか Mastery for Service の奉仕の練達のことを意味しているようで、いないような錯覚に陥ってしまう。

実は、人間という言葉も日本の倫理学を体系化したとされる和辻哲郎によると、今日の意味での人間、人類を意味していたのではなくて、世間や間柄を指す言葉だったらしい。『人間の学としての倫理学』によれば、「人間わずか五十年」「人間万事塞翁が馬」とか言う場合の人生、つまり「人である間」という意味、あるいは「世間」を意味したそうである。人間存在の日本的解釈をめざした和辻哲郎の意図とは別に、人間がまさに「人の間」人間関係を意味する言葉だったということは興味深い。

けっきよく、人間福祉とは世間福祉、人生福祉ということになるわけだけれど、世

間が人間関係を意味したとすれば、社会のなかでしか人間になれない人類、社会関係のなかで人間存在を証明しようとした和辻哲郎に乗っかるわけではないが、人が命あるかぎり、未来に夢をもって、現在を暮らし続けることを幸福な人生と呼べるなら、生活者としての視点から社会との関係を認識し、支援と援助をすることを人間福祉と理解しよう。

岡村重夫は、和辻倫理学を下敷きにしながら主体的存在としての人間個人を社会制度との関係性からその欠損や歪みを是正・調整するところに福祉性を求めたことで有名だが、生活者として生活困難や生活困窮を捉え、理解するところに人間福祉研究の核があると思える。生命、生活、人生のすべてを表す Life の言葉こそ人間福祉研究の探究しなければならない研究対象が隠されていると思うのである。